

論文

E. M. Forsterの場所の形状と構造 プラタナスの空洞とウィルソン株

Shape and Structure of Some Spaces in E.M.Forster's Novels
The Hollow of the Plane in ' The Road from Colonus ' and the Wilson Stump on Yakushima

小比賀香苗 (高知大学教育学部・英語教育 英米文学)

Kanae OBIKA

Laboratory of English and American Literature, Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan

ABSTRACT

This study provides a better and deeper understanding of Forster's sense of peculiar places and spaces and of " l'histoire des mentalite's. " In his novels, Forster made good use of the *genius-loci*, which had a special shape and belonged to an animistic environment. Forster's main characters have had overwhelming visions and inner transformations similar to epiphanies in such places. He referred to this trend in literature as ' the symbolic moment ; ' the eternal moment ' or ' the true moment ! I call it the ' fantastic moment ' because a fantastic experience awakens us and enables us to recognize our self.

With regard to the significant scenes in his novels, we must not forget the specific spaces and places such as those of a cup, a hollow tree, a valley and a cave. As we human beings originally are endowed by nature a sympathetic power with the vitality of the place, we have experienced the power of the living entity or the spirit of the earth. According to animistic thought, all things possess a spirit and sympathize with each other without words or use of the intellect. Forster believed that we could change our sense of values and views by making use of these unique powers. It is through these unique powers, which are found in the environment of our animistic world that we can have the sacred experience of visiting some special and unique place. We can find similarity with the hollow plane tree in ' The Road from Colonus ' and the Wilson stump, the Yaku cedar found on Yakushima, Japan. As a result of considering the shape of these two places and the style of the prayer, we notice that there are some common points of reactions and holy feelings for the specific shape. Hereafter, we intend to conduct research on the mental relationships between human beings and shapes.

はじめに

境界を設けて囲い込み分離した空間に対して、人間は守られている意識と閉じこめられている意識との対立矛盾する感情を抱く存在である。それは楽園と地獄の共通の語源にある「囲まれた場所」にも表れていて、同じ空間や場所に対して、視点次第によって、憧憬と忌避、そして安心と不安という矛盾した感情を懐いてきたのである。庭や楽園という囲まれた空間や場所に対して懐くこの感情は、始祖の楽園願望や楽園脱出(喪失)の際に刷り込みされた本能的感情として位置づける

ことができる。そこで場所や空間の形状には特別な意味が潜在していることになり、芸術では特殊な形状に個人的感性や民族的宗教的感情を反映させて、情景化して描写してきたのである。小説では特殊な形状を保つ特別な場所として構造化し、主人公に特殊で特別な感情を感得させている。このように感得される感情として、animismの範疇にあるThe *Genius-loci* (地霊)の働きを考えてきた¹⁾。原初的な生命体である精霊が宿る土地が、人間に対して働きかけるとする解釈と、人間の

中に潜在する土地への愛着や郷愁のように、特殊な土地に対して抱く、あるいは働きかける意識や感情の表れとする解釈もある。一方の働きかけにより他方が喚起されるものか、それとも啐啄同時であるのかにせよ、この特殊な土地への執着や愛好 (topophilia) は人間の原始的宗教的な感情に起因するものであり、知性や理性を超えた、本能的動物的なものとして考えられている²⁾。

生命力を感得させる土地や空間の特徴的な形状としてE.M.Forsterの 'The Road from Colonus' のプラタナスの巨樹と同様な似姿の屋久島の屋久杉の巨大な切り株であるウィルソン株に見いだすことができる³⁾。両者には自然の生命力や人知を越える働きに対する人間の畏敬の念や祈りの形を見いだすことができる。西洋ギリシャと東洋日本の隔絶した屋久島に存在する同様の形状に、それぞれ同種の感情を抱くことから、人間の原初の本能的心性を改めて考えさせられる。そこで本研究では、地霊や特別な場所や空間が保つ原初的な生命力を感得させる情景や形状を通して、特定の形状に対して特殊な感情を抱くことを、場所の構造と意味から考察するものである。

1 The Genius-loci (地霊) の情景

Forsterは 'The Story of a Panic' において、地霊の母体である森の破壊や崩壊が地霊の象徴であるPanの死の背景にあることを述べている。キリストの誕生が直接的な原因であることを象徴的に描写して、本能的無意識の世界である原初的汎心論的世界が地下へと潜行し、知的意識の世界が表舞台へと移行することへの抵抗とノスタルジアを潜在させている。時代の強大なベクトルである世俗化や都会化や人間化の象徴的現象である森の崩壊がPanの世界、つまりアニミズムの世界の崩壊を表していることでもある。一神教の世界ではなく、むしろそれに逆行するかのよう、後退的価値観とも言えるアニミズムの神々の世界の精神性をあえて保たせている。怠惰な主人公Eustace少年がPanと出会い、それが間接的に詩人への啓示となる人生のターニングポイントとも言える体験場所は次のような情景である。

The valley ended in a vast hollow, shaped like a cup, into which radiated ravines from the precipitous hills around. Both the valley and the ravines and the ribs of hill that divided the ravines were covered with leafy chestnut, so that the general appearance was that of a many-fingered green hand, palm upwards, which was clutching convulsively to keep us in its grasp. Far down the valley we could see Ravello and the sea, but that was

the only sign of another world. (10-11)⁴⁾

これまでに体験したこともない風光明媚な場所であることは、特別な場所であることを示している。地霊の母体である森の象徴的番人の居場所は、世俗世界から隔絶された別世界であり、峡谷に囲まれたカップ状の広大な林間の空き地である。葉の生い茂る栗の木も人間化して緑の指と掌を上を上げて人間を包み込む姿は、生命体である地霊の生命力の行使の象徴である。矮小化された人間は後退し、大自然の神々が支配するアニミズムの世界が具現化されて、地霊を感得すべき場所としているのである。

2 Colonusの情景

ギリシャのコロノスはオイディプス王の死地であることから、死ぬべき場所の象徴となっている。それゆえThe Road to Colonus「コロノスへの道」が自然の道筋となり、死への旅路、完結の旅路となる。ところがE.M.Forster はあえてThe Road from Colonus「コロノスからの道」としているの、死地からの復活、黄泉がえりということになる。この地への訪問で老人Lucasに四十年來の夢を果たさせ、自己認識に至るファンタジー体験である非現実的な地霊との出会いによる至福体験をさせる。ここまでなら Happy Ending のストーリーによる安定した十九世紀型の典型的な物語形式である。ところが、それにとどまらず Anti-climax の構成にして、老人の大真面目な自己認識を若者達によって茶化した上に、落ちを付加しているのである⁵⁾。老人の意志に反してまでも無理矢理娘達の手を借りて現実に戻させて、ロンドンのアパートでの老醜をさらす現実生活を送らせる。安易な非現実のファンタジーに収束してしまうのではなく、日常の醜悪な現実を味あわせるべく、リアリズムの世界に戻し、非日常のファンタジーや異次元の体験はあくまでも瞬間の象徴的体験として描かれるのであり、象徴主義小説の構造として、現実の二重性に寄与させているにすぎないのである。それ故に、このパロディーや皮肉という現実、地霊体験という非現実のファンタジーと対立しながらも、相互に補完し合うものであることから、安定した十九世紀の世界観の崩壊へと連関している、不安定で矛盾したフォースターの二元対立志向の認識方法の表れなのである。

非現実と関連づけるものとして、場所の特殊性、未体験の美しい自然や特別な大きさや形状の樹木や珍しい草花のあるゾーンがある。しかしそれらに留まらず、その特別性や特殊性を意味化しうる人物の感得や感得の特殊性が必須のものとして描かれるのもファンタジーの特徴である。それ故にファンタジーとは特別な人

間の特殊な感性によって、日常的ではない現実を異化して感得した世界ということにもなる。そこで異能を持つ選ばれた人だけに地霊という非現実の異次元空間の体験が用意されている。主人公ルーカスは英国から南国ギリシャに旅に出ている。旅は見慣れた現実を離れ、見慣れぬ非現実を体験することでもある。現実を離れることは、安定した自己認識を離れる自我の危機にもつながることから、内面の自己が表面化する契機となることもあるので、自己探求の旅と位置づけられることもある。

For the enormous plane that leant towards the Khan was hollow--it had been burnt out for charcoal--and from its living trunk there gushed an impetuous spring, coating the bark with fern and moss, and flowing over the mule track to create fertile meadows beyond. The simple country folk had paid to beauty and mystery such tribute as they could, for in the rind of the tree a shrine was cut, holding a lamp and a little picture of the Virgin, inheritor of the Naiad's and Dryad's joint abode. 'I never saw anything so marvellous before, said Mr Lucas. 'I could even step inside the trunk and see where the water comes from.'

For a moment he hesitated to violate the shrine. Then he remembered with a smile his own thought--'the place shall be mine; I will enter it and possess it'--and leapt almost aggressively on to a stone within. The water pressed up steadily and noiselessly from the hollow roots and hide crevices of the plane, forming a wonderful amber pool ere it spilt over the lip of bark on to the earth outside. Mr Lucas tasted it and it was sweet, and when he looked up the black funnel of the trunk he saw sky which was blue, and some leaves which were green; and he remembered, without smiling, another of his thoughts.

Others had been before him--indeed he had a curious sense of companionship. Little votive offerings to the presiding Power were fastened on to the bark--tiny arms and legs and eyes in tin, grotesque models of the brain or the heart--all tokens of some recovery of strength or wisdom or love. There was no such thing as the solitude of nature, for the sorrows and joys of humanity had pressed even into the bosom of a tree. (97-8)⁶⁾

ここで体験する光景はルーカスにとって驚くべきものである。お花畑が広がり、地中海沿岸に広がるAsphodelという天上に咲く不死の花が群生している。さらに進めば、英国では見かけたこともない巨大なプラタナス(=スズカケ)が見えてくる。この木はギリシャ

神話では再生の象徴であり、ヨーロッパでは最も聖なる木であり、「ヒポクラテスの木」とも呼ばれている。実際にはギリシャのコレにプラタナスの大木があり、この木は1919年の落雷により倒れて、倒木は薪に使われた。この作品では大風により木が倒れ、それによってカーンの住人に被害が及んだことが言及されている⁷⁾。大木は傾いて中が空洞になっていたことから倒れたようである。ここでは焼いて木炭を取り出したために中が空洞になっているとしている。木の生きている幹から勢いよく清水が湧き出して、木の皮にはシダやコケがむして、彼方には牧草地を作り出しているという。この巨樹と湧き出す水はオアシスの中心の情景である。つまり世界の中心であり、世界がここから始まっているとする世界軸の象徴なのであるから、宇宙樹でもある⁸⁾。ここに神の存在や働きを感謝して小さな祠が木の皮に彫り込まれている。そこにはランプとDryad(森の精霊)とNaiad(水の精霊)の跡継ぎとしてマリアの絵像が掛けられている。神の聖域の象徴である祠を超えて、巨樹の空洞部に侵入する。人が侵入できるほどの空洞がある。木の割れ目や空洞の根から静かに渾々と清水が湧き出している。その清水、いわば聖水を飲んでみる。そして黒い漏斗状になっている空洞の中から上を見上げると青空と緑の葉が見える。いわばこの聖なる水や聖域参拝によって蘇った人々は、この聖域を統括する神(Power)に感謝して、病気や怪我の治癒や俗化から聖化した回復の証しとして、その部分の木偶を供物として括り付けている。これはまるで東洋の寺院や神社の光景であり、科学的西洋的視点とは相容れない異様な光景とも思われるが、聖なる場所の聖なる力を信じて現世利益を求める本能的な民間信仰のなせるところである。そこは自然の静寂さである清潔に整理整頓されて醜悪さを拒むような場所ではなく、人間の喜怒哀楽が押し寄せている、俗悪邪険な人間の本性が生々しく表れている場所であり、すべてを容認し受容した救済の現場と言える場所なのである。この巨大な樹木と湧き出す清水、そしてその空洞が空と繋がっていることから、大地と空をつないでいる巨樹は世界の中心であり、世界の誕生や原初の世界の象徴であり、母胎の象徴でもあり、これらの形状がいわば人間の祈りの形状になっているのである。

3 祈りの形状とウィルソン株

屋久島のウィルソン株は、アメリカの植物学者Ernest Henry Wilson博士により1914年に調査された、屋久杉(樹齢千年以上)の大切り株である。入り口には鳥居が立てられ、そこが聖域であることを示している。切り株の下部が空洞になっていて、16~7m²ほどの

広さがあり、左の方向には神の存在の証として小さな社の祠が据えられて、神が祭られている。株の奥の突き当たりの岩の間から清水が渾々と湧き出している。空洞には何力所か隙間ができていて光が差し込んでいる。空洞の頭上を見上げれば、漏斗を逆さまにしたような状態になっていて、その上にはハート状に見える空が広がっている。

この東洋の屋久島の大切り株の空洞の不可思議な形状やそれを成した自然の業に対する純朴なる村人の畏怖と尊崇の心の現れは、ギリシャのプラタニステの巨樹プラタナスの空洞の形状とそれに対する驚異や尊崇の気持ちとは同種のものである。さらに屋久島という海に囲まれた場所と、砂漠に囲まれたオアシスという空間の、守られ囲まれたこの形状はまさに地霊の形状であり、その中心を形成しているのが空洞のある両巨樹なのである。

巨樹の象徴とは大地と空とを繋ぐ役割を果たしているものであり、その空洞から湧き出す清水は大地の血液とも言えるものである。要するに、ここは世界の中心であり、世界の誕生と関わる世界軸であり、宇宙樹や世界樹であり、母胎の象徴なのである。元来、巨樹は人間の寿命をはるかに凌駕しているところから、神が宿る神木として、民間信仰の対象となっていることは、英国のThe signal treeであるオークの木や日本の大楠、大銀杏、大杉などで、枚挙にいとまがないほどである。神社において樹木の伐採を忌避する理由もここにある。また仏典「仏説阿彌陀經」にも極楽浄土の上方世界には沙羅樹王佛という仏の存在があると語られている。つまり、民間信仰の象徴的对象となっているのである。

4 地霊との出会いの構造

松尾芭蕉は『奥の細道』にて、「余もいずれの年よりか、片雲の風にさそわれて、漂泊の思いやまず・」とか「そぞろ神の物につきて心をくるわせ、道祖神のまねきにあいて・・・」と旅へと誘われる心の様を述べている。そして「何かに取り憑かれて出かけたくなる」のは、兼好法師『徒然草』の「あやしうこそものぐるほしけれ」(妙に何かに取り憑かれたような気持ち)へと連関している。西洋では何かに取り憑かれることをDemon(守護神)の働きによると考えている。日本では「鬼」になるというような言い方になっている。いずれにしても心の中に欲求が芽生え、目覚めて胎動を始めるのである。

ルーカスのギリシャ訪問は四十年來の夢であり、心の中に秘めてきたものであった。その夢は胎動して四十年の歳月をかけてようやく実現したのである。出か

けてきたものの、"Yet Greece had done something for him, though he did not know it. It had made him discontented, and there are stirrings of life in discontent".⁹⁾の状態でその場所に遭遇し、偶然にも地霊を体験することになる。いわばルーカスの意志を超えた無意識的なところにある自己の表面化であり、具現化であり、Epiphanyと関連する現象である。いわば自己の守護神のようなものに導かれて、土地の守護神に遭遇するのである。それは視覚や聴覚から始まる体験であるが、やがて五感を超え、第六感とも言うべき、超感覚体験ともいえる共感覚現象でもあり、意志や意識に依らない偶然性と必然性が出会いの構造のエネルギーとなっているのである¹⁰⁾。

現実生活における不安や退屈が、その場所を離れて何処かへと誘うのは、自己の内面的葛藤が胎動している証しである。というも満足した状態では自己の内面の覚醒というファンタジーは起こっていないことからその説明はできる。自己の内面における胎動とは葛藤までに至っていない状態である。それが顕在化してくるのは自己存在の確固たる場所を離れてからである。つまり場所移動が不安を一層顕著にしていく。そして特別な場所であり特殊な形状の体験は、自己の危機意識を限界にまで高める。この自我意識を超えた瞬間に地霊と一体化して、自己の真実と出会う。この体験が象徴的瞬間であり、永遠の瞬間であり、真実の瞬間である¹¹⁾。いわばこのファンタジー体験を言語化し形状化するために、フォースターは地霊を使ったのである。そこで地霊は場所と不即不離の関係にあることから、フォースターのファンタジーはSpace Fantasyの範疇に入ると考えられる。その地霊の場所を舞台として、地霊感応体験から、自我の危機意識が覚醒されて、自己認識へと帰結されていく、一連のプロセスが小説の中で構造化されていく。地霊は小説の場所と空間を決定し、そこでのパン(パニック)体験は、人間の意識や認識を超えた超自然の働きのように、機械的に稼働されていく。これを構造化してファンタジーと呼称したのである。この体験は世界観を一変させる回心をもたらす。それ故に真実の自己との出会いから、自己発見、自己認識に至らせる。結果的には旅が自己探求の旅となるのである。

5 地霊の形状

地霊の形状が入り口のある周囲を囲まれたカップ状の林間の空き地であり、巨樹の空洞であることから、閉じられ、囲まれ、断絶した場所(空間)であるとともに、守られた場所(空間)でもあることになる。それ故Adela自我の危機に陥らせている *A Passage to India*

の洞窟もまた地霊の形状であることは明白である¹²⁾。さらに敦煌の莫高窟やパーミアンの石仏群のように、洞窟や岩の窪みや洞穴に神や仏を祭ることも、神仏の存在を感応する形状との連関を認めることができる。また神社や仏閣の建立の場所の特異性もこれらとの連関が推測される。囲まれた特別の空間とは、庭園や屋敷、また島や谷や窪地（凹地）でもある。これらの庭や窪みは伝統的に女性的で母性的なものの象徴であり、これらの体験はいわば動物心理学でいうimprinting（刷り込み）された子宮体験、つまりwombでの胎児体験と連関したものであり、母胎復帰願望の反映でもある。それはincubation（お籠もり）による自己を覚醒し自己発見や自己回復への効用とも連関しているのである。この人間の意識を超える様な体験は、'The Story of a Panic'での"brutal, overmastering, physical fear"のパニック恐怖体験として描かれていて、本能的な獣の感応を持つのは常人ではなく、意識や知性ではなく本能的感応をもつ野性人のものである。フォースター小説には、恐怖や血生臭い喧嘩や同性愛などといった、現代人の知性や意識や言葉を越えた、本能的動物の野性である、肉体や感覚や感応への退化を、人間の進化とし、救済として利用するかのよう、逆行のベクトルが明らかに認められる¹³⁾。つまり時代的社会的巨大なベクトルへの反抗であり挑戦であったのである。それ故に、森林の伐採という自然の崩壊が、アニミズム（多神的自然崇拜）からキリスト教への世界観の転換の象徴であり、それをキリストの誕生と地霊の象徴とも言えるPanの死（The great God Pan is dead.）として描いている。西洋文明の象徴であるキリストとキリスト以前を支配していた原初的な地霊の象徴であるパンの世界である。言語的、論理的、理性的、理知的なキリストの世界が表舞台に出たことから、呪術的感応的神秘的なパンの世界は裏舞台へと退場させられたのである。このような観点に立つと、フォースター小説の下部構造にあると考えられる地霊との出会いの構造は、この強力な時代的ベクトルに逆行している、いわば退化であり還元化であり、聖化の儀式のそれであったのである。従って、地霊に人間が感応して、地霊と遭遇し、一体化をするのは、ある一定の形状下にあることから、それらの形状を担う場所や空間は人間に先行し、人間を操る意志を持った存在として、小説に君臨する生き物となっているのである。要するに、フォースターは地霊を描くために特定の形状の場所を小説に設定したのであるから、地霊を担う場所や空間はフォースター小説の単なる情景ではなく真髓なのである。

おわりに

地霊との出会いの場所には、太初の時への憧憬や起源神話に見られるような太初への回帰願望が反映されているとともに、「自然の永遠なる相を觀照する太古の聖なる場所」によって、「自己を再認識できるような創造のプロセスという意味での樂園」と遭遇したのである¹⁴⁾。またさらに、場所や空間への憧憬や回帰願望の帰結としての地霊との出会いは、自己探求の象徴的結果としての瞬間体験であり、それはwomb回帰やincubation（お籠もり）等の母胎回帰の疑似体験を通しての自己復活の自助作用やhomeostasis（定常性）に連関したものと考えられる。そこには心性史の範囲に及ぶところがある。しかしそれ以上に時代や社会や個人を超えて、特殊な場所を特別と感応する心的感情は、ある特殊な形状に類似したものに対して同様に反応するような、科学的と言うより非科学的で心情的であり、日常の思考形式や感覚反応に影響を及ぼす形態や形状が人間に本能的に具備されていることが考えられるのである。

図や形状にどのような意味が象徴されているかについて研究する図像学がある。これは人間の心理や感情を象徴的に形状化し形態化してきた歴史的証明であり、また本能的に持ち合わせている形状化能力の証しである。つまり人間には形状化本能がある。これを言い換えれば、ある形状に対して特別な心理や感情を抱く本能的なものがあることになる。形態心理や形態感情が本来具わっていると考えることができる。これは民族性や時代や社会環境も素因となっている要素もあるが、それらを超越した人間の本能に関わっていると考えられる。ここで取り上げる小説の中心となる場所の形状と屋久島のウィルソン株とに象徴化される人間の本能的心性はそれを物語っているのである。

Notes

- 1 cf. Yi-Fu Tuan, *Topophilia* (Prentice Hall, 1978)
- 2 cf. 鎌田東二著『聖トポロジー』(河出書房新社, 1990), cf. 筒井均著『E.M.フォースターと「土地の霊」』(英宝社, 1983)
- 3 cf. <http://f32jp/510/post-10.html> Studio f32 Se-ji Ohsawa photo Studio
- 4 E.M.Forster, *Collected Short Stories* (Penguin, 1954), 9-27.
- 5 E.M.Forster, *Aspects of the Novel* (Arnold, 1927), 32.
- 6 E.M.Forster, *Collected Short Stories* (Penguin, 1954), 97-8.
- 7 Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain A Study of E.M.Forster* (Stanford, 1966), 145-7.

- 8 V.V.イワーノフ& V. N.トボローフ(北岡誠司編訳)『宇宙樹・神話・歴史記述』(岩波現代選書,1983), 209-212.
cf. J.Brosse (藤井・藤田・善本訳)『世界樹木神話』(八坂書房,2000)
cf. Jean Delumeau (西沢・小野訳)『楽園の歴史 地上の楽園』(新評論,2000)
- 9 E.M.Forster, *Collected Short Stories* (Penguin,1954), 96.
- 10 E.M.Forster, *Two Cheers for Democracy*(Arnold,1951), 136.
- 11 Wilfred Stone, op.cit., (Stanford, 1966), 145.
- 12 E.M.Forster, *A Passage to India* (Arnold, 1967)
- 13 cf. K.Obika 『E.M.Forsterの逆行のベクトル』『英語英米文学論集12』(安田女子大学,2003)
- 14 cf. W.Teichert (岩田行一訳)『象徴としての庭園』(青土社,1996)
cf. 井辻朱美著 『ファンタジーの魔法空間』(岩波,2002)
cf. 中山 理著 『イギリス庭園の文化史』(大修館,2003)